

利尻島の採集から

秋山 優

稚内からほど遠くないほぼ 25 マイルの海上に浮ぶこの島は、海藻の分布から考えると、海水というその条件からみても、必ずしも本道からは地理的な隔離をうけているとはいえない。ところが淡水藻の分布から考えると、その生態上からも生理的な隔離条件をもっているかのようである。今夏の採集もこのようなところから利尻島一帯の湖沼についての調査を試みたわけである。

実際に淡水藻の採集といつても、利尻島における湖沼の分布というものは必ずしも豊富というわけではなく、島内には二つの主だつた《ひめ沼》と《オタダマリ沼》とがみられるだけである。ところがこの二つの湖沼は、その生物分布上からみると極めて対照的な湖沼型に属していることが考えられる。そのひとつである《ひめ沼》は比較的高地の針葉樹林地帯にあり、その一端に湖水の流出口をもつた流水性の湖沼で、この為にならぬ中に検出される生物層も比較的広範囲にわたつて居り淡水藻としては、

Anabaena, Lyngbya, Calothrix,
Dinobryon,
Cosmarium, Staurastrum, Zygnema, Mougeotia,
Stigeoclonium, Aphanochaete,
Bulbochaete, Oedogonium

などが多量に認められ、いわゆる富栄養型湖沼の一例をなすものであり、またこの沼にみられる浮島の存在も、ひとつの特徴ある景観をかたちづつつているようである。ところがもうひとつの《オタダマリ沼》は、海岸からほど遠くない平地に形成された止

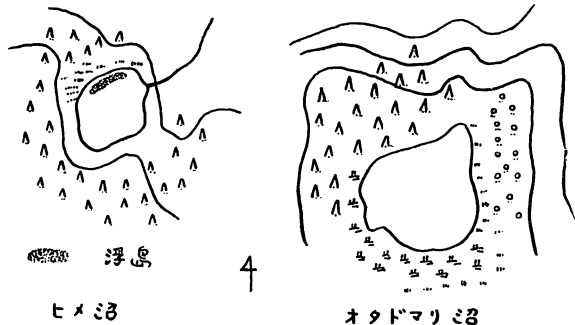




Photo 1. ひめ沼の浮島

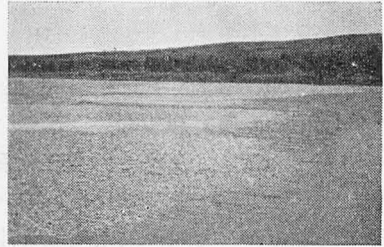


Photo 2. オタドマリ沼にみられるヒツジグサ群落

水性猪水型の沼で、またその近傍一带は蘚苔植物群を主体としたいわゆる泥炭性湿原を構成するもので、従つて水質も茶褐色を帯びた酸度の高いもので、またその中に検出される藻類も

Cosmarium, *Staurastrum*,
Scenedesmus

を数うるに過ぎない非調和型の特徴をあらわしている。この点まえに述べた《ひめ沼》とはいちじるしい対比がみられるわけである。

広さの点から考えても《ひめ沼》の約三倍の大きさをもつこの沼、ことさらにその生物層の貧弱さから幾分のもたりなさを感じさせるこの沼にもひとつの楽しみがある。それはこの沼の一端にくりひろげられた《ひつじぐさ》の群落である。開花季におとづれる採集者にとってはことさらにそれは、孤島利尻のひとつのなぐさめともなつてくれよう。(旭川東高等学校)

デンマルクの日

山田幸男

昨年7月14日から18日迄ノールエーのトロンドハイム市において第2回国際海藻専門討議会が開催され、それに出席する為7月7日の未明に羽田を發ち途中独乙のWilhelmshavenに立寄つた後26年振りにデンマルクのコペンハーゲン市を訪れた。同地には昭和4年約1箇月程滞在して当時植物博物